

ご利用案内



アクセス

- JR「三ノ宮」、阪急・阪神「神戸三宮」、ポータライナー・地下鉄（西神・山手線）「三宮」から南西へ徒歩約10分
- 新幹線「新神戸」から神戸市営地下鉄（西神・山手線）で「三宮」下車
- 神戸空港からポータライナーで約18分、「三宮」下車
- JR、阪神「元町」から南東へ徒歩約10分
- 地下鉄（海岸線）「旧居留地・大丸前」から南東へ徒歩約8分

利用案内

- 開館時間：午前9時30分～午後5時30分
（入館は午後5時まで）
- ※特別展開催時の金・土曜日は午後7時30分まで開館
（入館は午後7時まで）
- 休館日：毎週月曜日
（ただし、月曜日が祝日または休日の場合は開館し、翌平日に休館）
- ※年末年始のほか、整備休館など臨時に休館及び開館することがあります。

※詳細は右記のホームページか、博物館までお問い合わせください。



神戸市立博物館は、昭和10年（1935）に建築された旧横浜正金銀行神戸支店を増改築し、昭和57年に開館しました。御影石の外装を施した古典主義様式の建物で、平成10年（1998）に国の登録有形文化財（建造物）になりました。



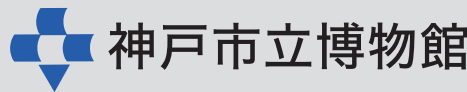
神戸市立博物館
公式ホームページ



Twitter・Facebook @kobemuseum
Instagram kobemuseum

発行年月日 令和4年（2022）3月25日
神戸市広報印刷物登録 令和3年度 第435号-2
広報印刷物規格B-2類

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、
展示会の延期・中止、ならびに関連事業の中止
をさせていただきます。



〒650-0034 神戸市中央区京町24番地
TEL.078-391-0035 FAX.078-392-7054
https://www.kobecitymuseum.jp/

学芸員の
ノートから
#114

百武兼行、裸婦に出会う

— 画家と私の“はじめまして” —



【図1】百武兼行《裸婦》1881（明治14）年頃
油彩・キャンバス、当館蔵

当館の所蔵資料のひとつに、百武兼行が描いた《裸婦》（1881（明治14）年頃、82.8×36.3cm）【図1】があります。小振りな縦長のキャンバスに、すらりとしてポーズをとる裸婦像が描かれた油彩画で、彼女の伏し目がちな表情や、光に照らされた身体の輝きが印象的な作品です。一方でこの作品は、いわゆる大作というわけではありません。もとより来歴を調べてみると、縁あって当館が2011（平成23）年に収蔵した時点では、《習作》（本画の準備や練習のために制作した作品のこと）と呼称されていたようです。

……どうか「なんだ、練習で描いた絵か」と思われること勿れ。今回は、昨年当館に異動して来た私自身の自己紹介も兼ねて、この作品との出会いとその魅力についてお話します。

その前に、百武兼行という人物について少し。1842（天保13）年、佐賀藩士・百武兼貞の二男として生まれた兼行は、佐賀藩最後の藩主である鍋島直定の側近と

して仕えました。その間、同じく佐賀藩士で直大の父・直正に仕えた古川松根に文人画風の画を学んだと伝えられています。1871（明治4）年、岩倉使節団の一員として渡米する直大に世話役として随伴した兼行は、その後も2度、直大の欧米巡遊に同行し、共に訪れたロンドンやパリ、ローマで、本格的に油絵の技術を学ぶに至ります。彼がどういった経緯で油絵に関心を持ったのかは未だ不明ですが、各地の画家に師事して大作にも取り組み、現地の展覧会にも出品するなど、かなり意欲的に画家の道を歩もうとしていたようです。しかしながら、巡遊を終えた兼行は、1882年の帰国後まもなく農商務省に出仕します。そしてその僅か2年後、肺結核のために42歳の若さでこの世を去ってしまうのです。

日本の洋画の黎明期に本場ヨーロッパで学んだ画家であるにも関わらず、今日に至るまでその名前が広く知られていないのは、画家よりもむしろ官界での活躍を囑望されていたことに加え、国内画壇で活躍する間もなく夭折したことも関係しているでしょう。現存する作品も約40点と少なく、その多くが留学中に制作されたものと考えられています。兼行がヨーロッパで油絵の技術を磨いている頃、日本は1876（明治9）年に工部美術学校が設置され、ようやく国内にも油絵を体系的に学ぶ教育機関が出来上がった段階にありました。兼行が帰国すると、今度は国内で国粋主義の思潮が台頭し、日本美術・日本画復興の機運が高まる一方で、洋画は不遇の時代を迎えます。西洋風の美術教育は後退し、1883年に工部美術学校が廃校、1887年に新しく開校した東京美術学校（現在の東京藝術大学）には、当初油絵の技術を学ぶ教室がなく、洋画は排されていました。これに反発した当時の洋画家たちが結集し、日本初的美術団体「明治美術会」を発足しますが、この時兼行はすでに亡くなっており、記念すべき洋画家たちの門下に立ち会うことは出来ませんでした。東京美術学校に西洋画科が開設されたのは1896年で、兼行の死後十数年経ってからのことです。

多くの洋画家たちが、工部美術学校で学びを得てから留学するなか、未だ滞在する日本人が少ないヨーロッパに渡り、ほとんど予備知識無しで西洋美術の世界に飛び込んだ兼行は、日本の洋画家のなかでもかなり特殊な経歴の持ち主です。“内側”から直接彼らの美的価値観や考え方に触れたことが、兼行の画業にどのような作用し、彼の生き方にとどのような影響を与えたのでしょうか。これは、洋画史における百武兼行の意義を

示すためにもますます研究すべき課題でしょう。

そして、兼行が最も衝撃を受けた西洋の美的価値観が、おそらく“裸を詳細に描く”ことではなかったのかと想像します。西洋の美術教育においては、イタリア・ルネサンスの時代から、人体のデッサンが最重要視されていました。筋肉や骨格の所在を理解し、正しく美しく人体を描くために、繰り返し裸体をデッサンすることが求められたのです。兼行は、ロンドン滞在中はリチャードソンという画家に、パリではレオン・ボナ、ローマではチェザレ・マッカリに師事したとされています。レオン・ボナ、チェザレ・マッカリは、いずれも当時画壇の重鎮として活躍していた、いわゆる古典や伝統を重んじる“アカデミック”な画家たちでした。兼行の作品を観ると、ロンドン時代には風景画が多く見られますが、パリ滞在以降は人物画が制作の中心となり、裸婦や女性像において優品を残しています。当館の《裸婦》は、まさしくローマ修学時代の作品です。

兼行は、洋画における裸体デッサンの重要性をいち早く理解した日本人の1人となったことでしょう。この観点において、兼行の裸婦像は記念碑的意義を持ちます。当館の作品をはじめ、この時期に兼行が描いた裸婦は、日本の洋画史にとって最初期の裸婦像と言えそうです。

ここで、作品そのものの魅力に立ち返ってみましょう。百武兼行が技術をものしよと一心に取り組んだ《裸婦》。描かれているのは、イタリア人女性のモデルです。彼女の立ち姿は一見すると軽やかですが、右足のふくらはぎや腹部には筋肉のすじがはっきりと描かれており、“確かにそこに立っている”人体の重みを感じさせます。指先まで神経の行き届いた繊細な手つきは、15-16世紀ヨーロッパの宗教画、特に旧約聖書に登場するイヴの姿を彷彿とさせますし、左足の力を緩め、身体にS字型の動きを生み出すポーズは、コントラポストと呼ばれるヨーロッパの伝統的な立像様式です。そして暗く簡潔な背景の処理は、女性の身体の曲線美や肌のきめ細やかさを際立たせるための技。それら全てが、絵具を筆で丁寧に塗り重ねることによってのみ表されています。シンプルであるがゆえに技術の粗が目立ってしまう“裸婦”という主題だからこそ、兼行がどれだけの学びと努力を積み重ねたかがわかります。それはまた、日本の画家たちが洋画の表現を追求した長い歴史の一幕でもあるのです。

昨年夏、佐賀県立美術館の学芸員の方が百武兼行の《裸婦》を借りて来られました。2021年9月から同館で開催された特別展「白馬、翔びたつー黒田清輝と岡



【図2】特別展「白馬、翔びたつ」
黒田清輝と岡田三郎助
（2021年、佐賀県立美術館）
展覧会チラシ

【図3】百武兼行《少女像》
1881（明治14）年
油彩・キャンバス
佐賀県立美術館所蔵

田三郎助」……日本の美術界を牽引した美術団体「白馬会」の創設者である黒田清輝と岡田三郎助の交流の軌跡を紹介する展覧会への出品です【図2】。岡田三郎助は、同郷の兼行が描いた洋画に心を打たれ、画家になることを決意したと言われています。岡田三郎助に影響を与えた彼の作品をぜひ一緒に展示したい、というご依頼でした。

展覧会には、当館の《裸婦》ともう1点、佐賀県立美術館所蔵の《少女像》【図3】が出品されました。《少女像》も、兼行のローマ滞在期に描かれた作品です。くっきりとした眉や鼻筋、小さな口元や骨格のはっきりした顎など、モデルの顔立ちを丁寧に描写したこの作品には、《裸婦》と同様、兼行の制作に対する真摯な姿勢が表れています。対照的に、少女が肩にかけているスカーフの図柄が、粒のような筆致で感覚的に捉えられているのも興味を惹く点です。裸婦像と女性像、兼行作品を象徴する2点が会場に並んだことは、心から感慨深いことでした。

展覧会が始まる直前、作品借用のために当館に来館されたご担当者、特に佐賀出身の洋画家を調査・研究されており、百武兼行の作品が当館に収蔵されたのを知ってすぐに調査に向かったという思い出を、とても楽しそうに話してくれました。収蔵庫で箱から《裸婦》を取り出すと「ああ、やっぱり百武の筆致がよく表れていますね」とおっしゃっていて、私もつい気持ちが高まったのを覚えています。実は私も、収蔵庫で初めてこの作品と対面した時、決して流暢ではないけれど、注意深く実直な兼行の筆遣いに強く惹きつけられました。その出会いの記憶がよみがえったのをきっかけに、今、少しずつ彼の作品について調べています。

もう少し《裸婦》と親しくなれたら、展示室で皆さんにもご紹介するつもりです。

（高橋 佳苗）

博物館だより

2022

No.121

KOBE CITY MUSEUM



【特別展】
スコットランド国立美術館
THE GREATS 美の巨匠たち



手芸にいそむ、純白のドレスの3人姉妹。そのまばゆいほどの高潔さは、ギリシア神話に登場する「三女神」が、時空を超えて18世紀の英国上流社会に降臨したかと思ふうばかりです。ジョシュア・レノルズ（1723-92）は、ロイヤル・アカデミー初代会長を務めるなど、当時の画家として突出した存在で、優美さと慈愛に満ちた人物を、歴史画のような壮麗な構成のなかに描くことで、英国肖像画の隆盛を導きました。

ジョシュア・レノルズ
《ワールドグレイヴ家の貴婦人たち》
1780-81年 油彩・カンヴァス 143.0×168.3cm
©Trustees of the National Galleries of Scotland

展覧会スケジュール 2022.4 — 2022.9

2022年	4月 April	5月 May	6月 June	7月 July	8月 August	9月 September
【休館日】	4・11・18・25	9～16・23・30	6・13・20・27	4・9～15・19・25	1・8・15・22・29	5・12・20・26～30

特別展	2/3階	特別展	特別展	特別展
2/5 sat	5/8 sun	7/16 sat		9/25 sun
【特別展】大英博物館ミイラ展 古代エジプト6つの物語 ■2月5日(土)―5月8日(日)			【特別展】スコットランド国立美術館 THE GREATS 美の巨匠たち ■7月16日(土)―9月25日(日)	

特別展	特別展	特別展	特別展	特別展
3/29 tue	5/17 tue	7/8 fri	7/16 sat	8/21 sun
■3月29日(火)―5月8日(日)	■5月17日(火)―7月8日(金)		■7月16日(土)―8月21日(日)	■8月23日(火)―9月25日(日)
隠元禪師と黄檗絵画	生誕300年 我が名は鶴亭リターンズ	異国への眼差し ―伊万里焼・萬古焼・源内焼	異国への眼差し ―伊万里焼・萬古焼・源内焼	英国からはじまる明治日本のスケッチ巡り
紅塵荘残照 一池長孟のまなざし	18世紀の京・大坂に花鳥画の新風を巻き起こした鶴亭(1722-85)。生誕300年を記念して、2016年の「我が名は鶴亭」展以来6年ぶりに、当館が所蔵する鶴亭作品を一堂にご紹介します。	江戸時代にヨーロッパの人々の注文に応じてつくられた作例や、国内向けの製品として阿蘭陀人、駱駝や象などの意匠を採る作例など、当館の異国趣味に満ちた陶磁器コレクションをご紹介します。	江戸時代にヨーロッパの人々の注文に応じてつくられた作例や、国内向けの製品として阿蘭陀人、駱駝や象などの意匠を採る作例など、当館の異国趣味に満ちた陶磁器コレクションをご紹介します。	明治時代、遠い日本に渡った英国人たちは、異国の自然や文化を水彩素描として描き留めました。彼らが残した作品や、彼らに影響を受けた日本人画家のスケッチから、明治日本各地の自然風景や人々の暮らしをたどります。
地図を作る人II 森幸安	鶴亭筆「牡丹綵帯鳥図」 明和6年(1769) 池長孟コレクション	はにわの世界 ―館藏品から―	はにわの世界 ―館藏品から―	災害と地図
	鶴亭筆「牡丹綵帯鳥図」 明和6年(1769) 池長孟コレクション	古墳には、外界と遮断するために墳丘や埋葬施設を囲って、円筒形の埴輪が立て並べられました。時代が新しくなるに従い、人物や動物など様々な形象埴輪がつけられました。古墳時代の埴輪の変遷をご紹介します。	古墳には、外界と遮断するために墳丘や埋葬施設を囲って、円筒形の埴輪が立て並べられました。時代が新しくなるに従い、人物や動物など様々な形象埴輪がつけられました。古墳時代の埴輪の変遷をご紹介します。	地震、火事、火山噴火など、さまざまな災害が発生しやすい日本。数多くの災害に関する資料のなかから、災害の様子を地図上に、あるいは絵画的に表現した「災害絵図」をご紹介します。
3/15 tue	5/22 sun	5/24 tue	7/16 sat	8/28 sun
	■3月15日(火)―5月22日(日)	■5月24日(火)―7月8日(金)	■7月16日(土)―8月21日(日)	■8月23日(火)―9月25日(日)
ガラスの文房具	ガラスの文房具	ガラスのかたち	型吹きガラスの素朴な美	切子の文様
		お皿や鉢、盃や脚付の杯などガラス器の「かたち」は様々です。西洋のガラス器や陶磁器、漆器などの異なる材質の工芸品から着想を得ていることも少なくありません。ガラスの「かたち」のルーツを探ります。	型吹きガラスの素朴な美	切子の文様
		鋼製経箱 内箱・蓋表 (一社)有馬温泉観光協会蔵 鎌倉時代、13世紀	型吹き唐草文ガラス菓子器 江戸時代(1772-1844) 池長孟コレクション	日本では19世紀以降にはじまるガラスの装飾技法「切子」。西洋製のカットガラスから着想を得た魚子文、霞文をはじめ様々な文様が器体を彩っています。手彫り磨崖切子をはじめ、江戸時代の切子の文様に注目します。

特別展	特別展	特別展	特別展	特別展
3/29 tue	5/17 tue	7/8 fri	7/16 sat	8/21 sun
■3月29日(火)―5月8日(日)	■5月17日(火)―7月8日(金)		■7月16日(土)―8月21日(日)	■8月23日(火)―9月25日(日)
新収蔵地域資料展	神戸の村と古文書	近世有馬の地誌	近世有馬の地誌	弥生時代の石器
	記録、証文、伝達などの目的で作成され、後世に伝わる絵図や文書。上津下村(現神戸市北区)に関わる近世の絵図と古文書から、神戸に生きた人々の営みをたどります。	古代から名湯の譽れ高く、現在でも訪れる人の絶えない有馬温泉。湯治場・観光地として愛され続ける秘訣を、今から数百年前、近世の人々が記した地誌からひもときます。	古代から名湯の譽れ高く、現在でも訪れる人の絶えない有馬温泉。湯治場・観光地として愛され続ける秘訣を、今から数百年前、近世の人々が記した地誌からひもときます。	弥生時代には、狩猟、農耕や祭祀の道具、そして争いの武器など、用途に応じた石器がつけられました。多種多様な石器が使われた社会背景について、市内の遺跡から出土した石器から紹介します。
	上津下村絵図 文化6年(1809)	稲野笹有馬小鑑 貞享2年(1685)版	稲野笹有馬小鑑 貞享2年(1685)版	磨製石戈と磨製石剣(西区青谷遺跡出土) 弥生時代中期、紀元前1世紀～1世紀

神戸の歴史展示
地域文化財展示
1階



コンスタブル
誰にとっても懐かしい風景

ターナーと並んで19世紀英国を代表する風景画家ジョン・コンスタブル(1776-1837)。彼が故郷サフォークの田園を長年にわたり描き続けた集大成ともいべき作品です。移ろいゆく空の雲、生命感豊かな木々、そしてどこまでも遠くに続いていく川や街並みの表現は、綿密な自然観察の賜物です。目にした瞬間にノスタルジックな光と風を体感できる、コンスタブル渾身の傑作です。

ジョン・コンスタブル 《デダムの谷》
1828年 油彩・カンヴァス 144.5×122.0cm
©Trustees of the National Galleries of Scotland



グラント
お父さん、元気だね。

フランシス・グラント(1803-1878)は最初の、そして唯一のスコットランド出身のロイヤル・アカデミー会長になるなど、ヴィクトリア朝のエリートたち御用達の肖像画家としての地位を確立しました。そんなグラントが、愛すべき次女・デイジーを描いたのが本作。雪景色のなか、自信に満ちた表情でこちらを見つめるスタイリッシュなデイジーは、実は結婚を目前に控えていたのです。グラントが亡くなるまで手元に置いていた作品で、謹重な肖像画を専門とした彼の、家族への愛情に満ちた別の一面を伝えています。

フランシス・グラント
《アン・エミリー・ソフィア・グラント
("デイジー"・グラント)
ウィリアム・マーカム夫人(1836-1880)》
1857年 油彩・カンヴァス 223.5×132.3cm
©Trustees of the National Galleries of Scotland



(塚原 晃)

【特別展】
THE GREATS
スコットランド国立美術館
美の巨匠たち
7月16日(土)―9月25日(日)



エディンバラ旧市街の景観
右奥にそびえているのがエディンバラ城。
その麓にスコットランド国立美術館の新古典様式の建物が見えます。

ザ・グレイツ
北国を彩る巨匠たち

周辺の壮大な自然環境と、起伏に富む重厚な街並みで「北のアテネ」とも称される古都・エディンバラ。その中心に位置するスコットランド国立美術館のコレクションは、まさに「北のルーヴル」と呼べるほどの充実ぶりです。本展ではエル・グレコ、ペラスケス、レンブラントなどの西洋絵画の巨匠作品に加え、ゲインズバラ、レノルズ、コンスタブルなど英国絵画の至宝が集まります。しかも多くの出品作品が日本初公開となります。

ペラスケス

慌ただしい日常、鮮烈な一瞬

「画家の中の画家」とも称せられる、17世紀スペイン絵画の巨匠ディエゴ・ペラスケス(1599-1660)。彼が10代に描いたこの作品では、食器やガラス瓶などに、本物と見紛うほどの質感描写が見られます。特に、いま料理されつつある卵の自身が半熟となる瞬間をとらえた描写は鳥肌モノです。庶民の日常を切り取ったような光景でありながら、暗闇に浮かび上がる少年と老女のたたずまいに気高い威厳が感じられるなど、この天才画家の早熟ぶりが発揮された傑作です。



ディエゴ・ペラスケス 《卵を料理する老婆》
1618年 油彩・カンヴァス 100.5×119.5cm
©Trustees of the National Galleries of Scotland

